「教育臨床総合研究紀要４　2005研究」

小学校家庭科における布を用いた製作活動の学びの実態

Actual Conditions of Learning to Sew in Elementary School of Home Economics

竹　吉　昭　人*　多々納　道　子**
Akihito TAKEYOSHI　Michiko TATANO

要　旨

本研究では、児童へのアンケート調査を通して、小学校家庭科における布を用いた製作活動に関する意識や実態と日常の衣生活に関する実態把握を行い、今後の製作活動の指導のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的とした。児童は製作活動に対しては、全体的にみて肯定的に捉えていた。今後、製作活動を核にして衣生活学習を構成することが望まれ、日常生活への実践化に向けたさらなる取り組みの強化が必要であることが明らかになった。

[キーワード]　製作活動、衣生活の実態、日常生活への応用、学習意欲

Ⅰ．はじめに

現代の子ども達は、大量生産と大量消費による物の文化の中で育ってきた。加えて、家庭の機能の外部化、家族構成の変化や親の教育観等の影響によって、子ども達が家庭の仕事を分担する必要性が次第に薄れてきた[1)]。それらの結果、日本家庭科教育学会による「児童・生徒の家庭生活の意識と実態に関する調査」[2)]にみられるように、子ども達は家族の一員として家庭の仕事をあまり分担していないことが明らかにされている。また、文部省による小学校・中学校の児童・生徒およびその保護者を対象にした、「家庭や地域などでの子どもの生活体験や自然体験等に関する調査」[3)]によれば、現代の子ども達は、生活・自然体験が親の世代に比べて総じて減少しているものの、手伝い・生活体験・自然体験が豊富な子どもほど、道徳観や正義感が身についていると分析されている。このような実態からみると、子ども達は、心と身体を動かし、心や命を尊ぶこと、作る楽しみや働く喜びなどを体験する機会が少なく、基本的な生活習慣や生活技能の習得が十分ではないことが推測される。

家庭科は生活者として自立する能力である生きる力を育成することを目的としており、この目的達成には実践的・体験的な学習を取り入れ、実生活に生かせるように内容や方法を工夫することが、強く求められる。これまで家庭科における布を用いた製作活動（以後、製作活動と

＊　島根大学大学院教育学研究科
＊＊　島根大学教育学部人間生活環境教育講座

する）は、家庭生活に必要な知識・技能の習得という実用面から重視されてきた。しかし、日常の家庭生活において被服製作が必ずしも必要でなくなり、実用上の価値が低下してきた現在、製作活動を行う意義を再考し、今後の製作活動のあり方を検討することは、重要である。

そこで本研究では、小学校家庭科の製作活動について、６年生を対象にアンケート調査を実施し、製作活動への取り組みや製作意識、児童の日常の衣生活に関する実践状況などの実態把握を行い、今後の製作活動のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的とした。

Ⅱ．調　査

１．調査対象

調査は、島根県内の公立小学校４校の６年生全員を対象に実施した。有効回答数は、男子145人、女子175人、計320人であった。

２．調査方法

調査方法は質問紙法で各学校に調査を依頼し、家庭科担当教員あるいは学級担任の下で実施した。

３．調査時期

調査時期は2004年２月下旬から、３月上旬であった。

４．調査内容

調査内容については以下の通りである。

⑴　「生活に役立つ物を製作しよう」の授業の好き・嫌い
⑵　製作活動の得意・不得意と不得意部分の自己評価
⑶　「生活に役立つ物を製作しよう」の授業の改善点
⑷　衣生活に関する学習で、今後もっと学びたい内容
⑸　「生活に役立つ物を製作しよう」の授業の日常生活への応用
⑹　家庭生活における児童の衣生活に関する実践状況
⑺　日常生活における児童の製作活動の状況
⑻　家族の製作活動の頻度

Ⅲ．結果及び考察

１．「生活に役立つ物を製作しよう」の授業の好嫌

「生活に役立つ物を製作しよう」の授業をどのようにとらえたかについて明らかにするため、授業の好嫌を調査した結果は、表１に示す通りである。

全体で80.0%が「好き」あるいは「どちらかというと好き」と答えており、子ども達にとって、製作活動は意欲的に取り組め

表１　「生活に役立つ物を製作しよう」の授業の好嫌　　人(%)

	好き	どちらかというと好き	どちらかというと嫌い	嫌い
男子	35(24.1)	71(49.0)	31(21.4)	7(4.8)
女子	72(41.1)	78(44.6)	17(9.7)	5(2.9)
合計	107(33.4)	149(46.6)	48(15.0)	12(3.8)

$\chi^2=15.18>\chi^2_{0.01}=11.34$　df＝3

る授業であるといえる。男女間で比較すると、「好き」では男子24.1%、女子41.1%、「どちらかというと嫌い」が男子21.4%、女子9.7%となった。χ^2検定を行ったところ、１%水準で有意差が確認でき、男子より女子の方がより製作活動を好んでいるという結果であった。

２．製作活動の得意・不得意と不得意部分の自己評価

製作活動は得意か不得意かを明らかにし、表２に示した。

全体的にみると、「どちらかというと苦手」が40.3%、「苦手」が11.9%と約半数の児童が苦手意識をもっているという結果であった。表１に示した「生活に役立つ物を製作しよう」の授業の好き嫌いより、製作活動に対しては好意的に受け止めている児童が多いことを考えると、総じて製作活動は好きだけれども、得意ではないということを示すものであった。

表２　製作活動の得意・不得意　人(%)

	得意	どちらかというと得意	どちらかというと苦手	苦手
男子	9(6.2)	38(26.2)	71(49.0)	26(17.9)
女子	28(16.0)	74(42.3)	58(33.1)	12(6.9)
合計	37(11.6)	112(35.0)	129(40.3)	38(11.9)

$\chi^2=25.52>\chi^2_{0.01}=11.34$　df＝3

男女間で比較すると、「得意」と「どちらかというと得意」と答えた男子が32.4%、女子が58.3%と女子の方が得意であると答える傾向が強かった。さらに「苦手」と「どちらかというと苦手」とする答えは、男子が66.9%に対して女子が40.0%となった。χ^2検定においても１%水準で有意差があり、男子の方が女子と比べ、より苦手意識をもっているということが明らかとなった。

表３　製作活動の苦手部分の詳細　人(%)

	糸通し	玉結び	玉止め	手縫い	ミシンの上下糸セット	ミシン縫い	しるしつけ	布を裁つ	その他
男子	91(19.6)	28(28.9)	49(50.5)	33(34.0)	64(66.0)	22(22.7)	24(24.7)	22(22.7)	3(3.1)
女子	17(24.3)	17(24.3)	22(31.4)	29(41.4)	40(57.1)	17(24.3)	21(30.0)	22(31.4)	5(7.1)
合計	36(21.6)	45(26.9)	71(42.5)	62(37.1)	104(62.3)	39(23.4)	43(25.7)	44(26.3)	8(4.8)

$\chi^2=8.37<\chi^2_{0.05}=15.51$　df＝8

製作活動が得意か不得意かという質問に対して、「どちらかというと苦手」と答えた129人、および「苦手」と答えた38人の計167人の児童に対して、どの部分が苦手であるかを調査し、表３に示した。

子ども達が最も苦手としている部分は「ミシンの上下糸セット」で62.3%、次いで「玉止め」42.5%、「手縫い」37.1%の順となった。

製作活動のメインは縫うことであり、製作活動に苦手意識をもつ児童は、調査前には手縫いとミシン縫いという縫うことを苦手と感じているのではないかと予想していた。しかし、実際には子ども達が苦手と感じている部分は縫うことではなく、「ミシンの上下糸セット」や「玉止め」であり、さらに「しるしつけ」25.7%、「布を裁つ」ことには26.3%のものが苦手ととらえていた。これらは製作活動において最も基本というべき技能であり、程度の差はあるものの、苦手意識をもっている児童は少なくないといえる。

製作活動に入る前に「自分はできない」とか「苦手だ」というような苦手意識をもってしまっ

た児童に対して、その状態で製作活動に取り組ませたならば、当然学習意欲は低く、知識や技能も十分に定着していかないだろう。関心・意欲・態度といった面では、一つのものを製作する過程において、完成へ向かうことで高まりが見られ、完成した時には、ある程度の達成感や充実感は得られるものである。しかし、このような関心・意欲・態度の高まりや、達成感や充実感を得られたとしても、知識・技能の定着が図られ、「自分はできるようになった」という製作活動に対する自信がもてなければ、そこから実生活での実践に向けた意欲や態度にはつながっていき難い。教師として、児童の苦手意識を克服できる指導や取り組みを製作活動の中で行い、より高い意欲をもち、積極的に製作活動に取り組み、実生活での実践化に向けた態度を育てる必要がある。表１、表２でも明らかなように、児童は、製作活動に対して苦手意識はもっているものの、好きだという傾向にあり、意欲的に取り組む態度がある。このような児童の実態をふまえて、基礎・基本をきめ細やかに指導することによって、製作活動をより充実した活動に転換する必要がある。

３.「生活に役立つ物を製作しよう」の授業の改善点

製作活動にもっと意欲的に取り組むために、児童がどのような指導を望むかを調査し、表４に示した。

表４　製作活動に意欲的に取り組むための改善点　　人(%)

	授業の時間をふやす	みんなで同じものを作る	自分で作りたいものをそれぞれ作る	先生やボランティアの人など、作り方を教えてくれる人が２人以上いる	ミシンなどの道具の数をふやす	その他
男子	35(24.1)	29(20.0)	102(70.3)	64(44.1)	53(36.6)	1(0.7)
女子	63(36.0)	18(10.3)	134(76.6)	81(46.3)	76(43.4)	4(2.3)
合計	98(30.6)	47(14.7)	236(73.8)	145(45.3)	129(40.3)	5(1.6)

$\chi^2 = 10.18 < \chi^2_{0.05} = 11.07$　df＝５

最も多かったのは「自分で作りたいものをそれぞれ作る」で73.8%、次いで「先生やボランティアの人など、作り方を教えてくれる人が２人以上いる」が45.3%、「ミシンなどの道具をふやす」40.3%の順となった。これらの結果から、児童は、自分達の作りたいものが自由に作れる事と、そのための人的環境と物的環境の充実を望んでいることが理解できた。

児童が「自分で作りたいものをそれぞれ作る」ことを可能にするには、個々人が製作活動に必要な知識・技能をしっかりと身に付けることがまず必要である。しかし現状では、表２のように、製作活動に対して苦手意識をもっている児童が約半数いるということは、製作活動に必要な基礎的・基本的な知識や技能を十分に身につけているとは言い難い。このような状況の中で、「それぞれが作りたいものを作る」という教材を展開するならば、作りたいものは決まったが、自分で作ることはできず、逆に製作活動に対する意欲を低下させるばかりか、知識や技能の定着もままならないということが予測できる。

「自分で作りたいものを作る」ことを実現するには、人的・物的環境の整備・充実は欠かせない。このことは児童だけではなく、教員からも強く求められていることである[4)]。基礎・基本の定着を図り、より実りある製作活動にするためには、今回の調査によって明らかになった

課題を一つひとつ解決し、個々の児童の興味・関心に沿った取り組みができるよう改善していくことが必要である。

４．衣生活に関する学習で、今後もっと学びたい内容

小学校家庭科の学習をほぼ終えた６年生が、これまでの衣生活に関する学習で、どんな内容に興味や関心をもち、今後さらに学習したいと思っているかについての結果を、表５に示した。

表５　今後さらに学習したい内容　　人(%)

	衣服の役割・特徴	布の種類・特徴	衣服の購入時の選び方	洗たく方法	補修方法	手縫い	ミシン縫い
男子	17(11.7)	53(36.6)	55(37.9)	52(35.9)	42(29.0)	55(37.9)	82(56.6)
女子	25(14.3)	54(30.9)	64(36.6)	40(22.9)	65(37.1)	96(54.9)	147(84.0)
合計	42(13.1)	107(33.4)	119(37.2)	92(28.8)	107(33.4)	152(47.5)	229(71.6)

$\chi^2=20.47>\chi^2_{0.01}=16.81$　df＝６

今後、最も学習したいと思う内容は「ミシン縫い」で、男子56.6%、女子84.7%であった。男女ともに、他の内容と比べて群を抜いて高い割合となったことから、ミシン縫いに対する興味や関心の高さが伺えた。次いで多かったのは、男子が「手縫い」と「衣服購入時の選び方」の37.9%、女子が「手縫い」54.9%、「補修方法」37.1%、「衣服購入時の選び方」36.6%であった。よって、小学校家庭科の衣生活に関する学習を通して、児童は製作活動に対して最も興味や関心を抱き、さらに学習したいと考えていることが明らかとなった。また、男女間で学習したい内容に違いがあるかどうかを明らかにするためにχ^2検定を行ったところ、１%水準で有意差が認められた。女子が男子と比較して製作活動に対して、より一層強い学習意欲を示した。その他の内容についても、男女ともにさらなる学習を求める声が少なくなかった。

児童の意識からみると、今後、衣生活に関する学習は製作活動を中心にして、衣服の選び方、着方や手入れなどの内容を構成するように工夫する必要がある。

５．「生活に役立つ物を製作しよう」の授業の日常生活への応用

製作活動を通して学んだ事を日常生活においてどのようなところで活かしているかということについて、あてはまるところ全てに記入する形式で調査し、結果を表６に示した。

表６　製作活動で学んだ事を日常生活でどのようなところで活かしているか　人(%)

	布を使って物を作ること	ほころび直しや、取れたボタンを付けること	衣服の着方を考えたり、楽しんだりすること	服やバックなどを買う時に気をつけること	布の特徴を調べて洗たくすること	環境のことを考えたり、お年寄りとふれあったりすること	将来、自分がどのような仕事につきたいかを考えること	その他
男子	56(38.6)	22(15.2)	28(19.3)	40(27.6)	27(18.6)	22(15.2)	16(11.0)	5(3.4)
女子	130(74.3)	69(39.4)	44(25.1)	50(28.6)	37(21.1)	30(17.1)	20(11.4)	5(2.9)
合計	186(58.1)	91(28.4)	72(22.5)	90(28.1)	64(20.0)	52(16.3)	36(11.3)	10(3.1)

（複数回答）　$\chi^2=15.31>\chi^2_{0.01}=14.07$　df＝７

表６より、最も多く上がったものは、「布を使って物を作ること」で男子38.6%、女子74.3%と男女間においては差があるものの、男女ともに他の内容と比較して多かった。次いで多かったのは、男子が「服やバックなどを買う時に気をつけること」27.6%、女子は「ほころび直しや取れたボタンを付けること」39.4%となった。χ^2検定においても、５%水準で有意差が見られ、男女間に明白な違いがあった。

これらの結果から、女子の方が男子と比べて、製作活動で学んだ「縫う」という知識や技能を、日常生活での「縫う」事に直接活かしているということが明らかとなった。また、その他、「衣服の着方や購入方法」、「布の特徴を考える」、「環境問題などの社会的課題」、「自分の将来を考える」といった内容では、日常生活において活かしていると答えた児童もおり、製作活動を通して学べることは多様であり、製作活動をする意義は決して少なくないといえる。

６．家庭生活における児童の衣生活行動に関する実践状況

家庭生活での児童の衣生活行動である衣服の購入、着用する服の選択、洗たく、衣服の管理、衣服の手入れ、補修、製作の実践状況を明らかにし、表７に示した。

衣服の購入時に、自らが選んで決定しているかどうかについては、児童全体でみると、「いつもする」が男子31.0%、女子65.1%、「たまにする」が男子49.7%、女子29.1%と、多くの児童が、衣服を購入する際の選択、決定を実践しているという状況が確認できた。また、外出時に着用する衣服を、自分で選んでいるかどうかでは、男子約７割、女子約９割とほとんどの児童が自分で選んでいるという結果であった。

衣服の購入時の選択・決定、着用する衣服の選択について、男子と女子の間に違いがあるかどうかを明らかにするために、χ^2検定を行ったところ、１%水準で有意差が認められた。男女ともに高い実践状況を確認できたものの、その頻度に違いがあり、女子がより頻繁に実践しているという結果であった。このように、男女ともに購入時の選択よりも高い実践状況がみられたのは、購入の場合、親が負担をするというように経済面での制約によって、自分一人の判断で購入できない場合があるが、着用する衣服では、手持ちの衣服の中から選択できるので、自分の判断で選べるということによるものと考えられる。

６年生にもなると、購入の際にも、着用する衣服を選ぶ際にも、自ら行う機会が非常に多く、今回の衣生活に関する家庭での実践状況を尋ねた質問項目の中でも、男女ともに最も高い実践状況となった。

現行の学習指導要領によると、衣生活に関する学習では、「衣服に関心をもって、日常着を着たり手入れをしたりすることができるようにする。」という内容において、さらに「日常着の着方を考える」という項目が含まれている[5)]。本調査によって明らかになった購入時や外出時の衣服選択の高い実践状況からみると、「衣服の購入」をも視野に入れた、日常着の選択や着方の学習がさらに必要であると考えられる。また、「身の回りの物や金銭の計画的な使い方を考え、適切に買い物ができるようにする。」との関連を図ることによって、金銭的な計画を踏まえ、衣服のよりよい購入ができる能力を育成できるものと考えられる。

さらに、現段階では日常着の選択については、中学校での学習内容になっている。しかし衣服を選択・購入する際に、サイズ表示を理解しておくことは必要事項であるので、このサイズ

表示については、発展的な内容として学習することにより、その知識が実際の生活の中で生かせるものとなる。

表７　家庭生活における衣生活に関する実践状況

人(%)

	いつもする		たまにする		ほとんどしない		まったくしない		χ^2値
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
服を買う時に自分で選ぶ	45 (31.0)	114 (65.1)	72 (49.7)	51 (29.1)	20 (13.8)	9 (5.1)	7 (4.8)	0 (0.0)	42.25**
出かける時に着る服を自分で選ぶ	107 (73.8)	159 (90.9)	25 (17.2)	12 (6.9)	10 (6.9)	1 (0.6)	3 (2.1)	2 (1.1)	19.82**
自分の着た服やソックスなど手洗いする	3 (2.1)	3 (1.7)	12 (8.3)	28 (16.0)	45 (31.0)	74 (42.3)	83 (57.2)	68 (38.9)	12.22**
洗たく物をたたんでしまう	22 (15.2)	48 (27.4)	54 (37.2)	72 (41.1)	44 (30.3)	33 (18.9)	24 (16.8)	21 (12.0)	11.27*
アイロンをかける	2 (1.4)	12 (6.9)	20 (13.8)	73 (41.7)	44 (30.3)	59 (33.7)	78 (53.8)	33 (18.9)	56.65**
ほころびを直したり、取れたボタンを付けたりする	1 (0.7)	14 (8.0)	9 (6.2)	40 (22.9)	26 (17.9)	64 (36.6)	108 (74.5)	56 (32.0)	61.12**
布を使って物を作る	1 (0.7)	10 (5.7)	15 (10.3)	92 (52.6)	44 (30.3)	50 (28.6)	83 (57.2)	22 (12.6)	96.26**

＊＊…$p<0.01$　＊…$p<0.05$

自分が着用した衣服を手洗いするかについてみると、「いつもする」と「たまにする」を合わせても児童全体で14.4%と低い実践状況であった。さらに、「まったくしない」と回答した児童は全体で47.2%、男子では57.2%と半数以上の児童が日常生活での手洗いの経験がまったくないということであった。また、女子においても「まったくしない」が38.9%となっており、今回の調査項目の中では、「自分の着用した衣服の手洗い」の実践が最も低かった。

学習指導要領では、「衣服に関心をもって、日常着を着たり手入れしたりすることができるようにする。」の中に「日常着の手入れが必要であることが分かり、ボタン付けや洗たくができること。」として、手洗いを中心とした基本的な洗たくの学習をするようになっている[5)]。しかし、本調査結果からは、洗たくの学習が日常生活にあまり活かされていないことが伺える。

今日の日常生活の中では、洗たく機の普及によって、手洗いをする機会事体が少ないということもあろうが、繊維や汚れの種類によって、あるいは、効率よく洗たくするためには手洗いの知識・技能は必要であり、子ども達に是非身につけてほしいものである。

衣服管理の代表として、「洗たく物をたたんでしまう」を取り上げた。男女ともに最も多かったのは「たまにする」で男子37.2%、女子41.1%となった。それぞれにおいて、次に多かったのは男子が「ほとんどしない」30.3%、「いつもする」15.2%、女子が「いつもする」27.4%、「ほとんどしない」18.9%となっていた。χ^2検定を行ったところ、５%水準で有意差が見られた。今回の衣生活に関する質問項目の中では、最も男女差が少なかった項目であった。洗たく物を「たたんでしまう」というような、極めて軽度の家事作業であっても、女子の方が男子に比べて頻繁に実践していることが明らかとなった。

アイロンかけの実践状況について見ると、「いつもする」と答えた児童は男子1.4%、女子6.9%と、ともに少なかった。一方で「まったくしない」と答えた児童は男子53.8%、女子18.9%と差が見られ、χ^2検定においても１%水準で有意差があることを確認できた。男子において

は、「自分の着用した衣服の手洗い」に次いで、約半数が日常生活での実践をまったくしていないという結果であった。

アイロンについての学習は、指導要領には特に記述されていないものの、製作活動の過程では、効率よく作業を進めたり、よりよい仕上がりには必要な技能である。日常生活全般でアイロンがけをする機会はそう多くはないかもしれないが、子ども達にはぜひ身につけてほしい知識・技能である。各家庭においては、積極的に子ども達にアイロンをかけるという生活体験をさせて欲しいと思う。また、学習活動の様子を家庭に知らせることを通して、家庭科として各家庭に働きかけていくことも重要であろう。

ほころび直しやボタン付けといった、衣服の補修の実践についてみると、「いつもする」が男子0.7%、女子8.0%と極めて低い結果となった。今日の衣生活では、衣服の補修が必要になることは少なく、また、衣服の補修といっても、学習指導要領ではボタン付け程度の学習となっており、補修の方法が分からないということも考えられる。特に男子については、「まったくしない」が74.5%と高く、「衣服の補修」は今回の調査項目の中で最も低い実践状況であった。

ボタン付けや簡単なほころび直しなど衣服の補修については、一枚の衣服を大事にすることや資源としての布という観点から、環境問題と関連させて指導できる内容である。したがって、身に付けてほしい必要最低限の知識や技能といえる。

日常生活における布を用いた製作活動の実践状況は、「いつもする」が、男子0.7%、女子5.7%と低い結果となった。「たまにする」では男子は10.3%であったが、女子は52.6%と約半数のものは、実践経験があるということであった。一方、男子は「まったくしない」57.2%と、半数のものは日常生活において製作活動をまったくやっていないという結果になり、女子と実践状況に大きな差がみられた。

日常生活における製作活動となると、必要だからするということに加え、趣味や遊びとして行う場合も多くある。よって、男女にこのような差が出たのは、男女の興味、関心の違いや、遊びの違いからくるものだと考えられる。

７．日常生活における児童の製作活動の状況

学校以外での手縫いとミシン縫いを用いた製作経験についてみると、手縫い、ミシン縫いともに全体で約半数の児童が経験をしていた。しかし、男女間で比較すると、女子は手縫い77.7%、ミシン縫い66.3%と高い割合で経験しているのに対して、男子は手縫い27.6%、ミシン縫い33.1%と低い割合であった。χ^2検定によっても、それぞれについて１%水準で、男女間に有意差が認められた。

男女それぞれについて、手縫いとミシン縫いのどちらがより多く実践されているかを表８よりみると、男子はミシン縫いが多く、女子は手縫いが多い結果となり、男女で異なった傾向がみられた。これは、男子の場合、手縫いよりも、ミシンを用いて縫うことに、より興味・関心をもっているということ、女子の場合は、頻繁に製作活

表８　学校以外での手縫い・ミシン縫いの製作経験　人(%)

	手縫い	ミシン縫い
男子	40(27.6)	48(33.1)
女子	136(77.7)	116(66.3)
合計	176(55.0)	164(51.2)

手縫い
$\chi^2=80.51>\chi^2_{0.01}=6.63$　df＝1
ミシン縫い
$\chi^2=34.95>\chi^2_{0.01}=6.63$　df＝1

動を行う分、より手軽な手縫いが用いられたのではないかと考えられる。

具体的な製作物について、自由記述によって回答を求め、多く上がったものから順に、表９に示した。

手縫いを用いた製作では、男女ともに、ぞうきん、ふくろ物、小物入れの製作が上位に上げられた。表８「学校以外での手縫い・ミシン縫いの製作経験」でも明らかなように、女子の方が実践の割合が高く、そのためか製作物は男子よりも多様なものが上げられていた。さらに、マスコットやぬいぐるみの服など、男子の製作物ではあまりみられないものもあり、男女の興味・関心の違いが、学校外での製作活動に大きく影響を与えていることが伺えた。また、手縫いにおいては、取れたボタンを付けるなど補修の実践も見られ、日常生活において様々な場面で活かされているといえる。

表９　学校以外での手縫い・ミシン縫いの製作物　（人）

手縫い				ミシン縫い			
男子		女子		男子		女子	
ぞうきん	14	巾着	17	ぞうきん	29	かばん	30
ふくろ物	10	かばん	15	ふくろ物	12	ふくろ	12
ふくろ	6	ふくろ	11	かばん	4	巾着	7
かばん	2	ナップサック	2	ふくろ	2	給食袋	4
巾着	1	弁当袋	1	リュックサック	2	ナップサック	4
ナップサック	1	マスコット	35	巾着	1	体操服入れ	1
小物入れ	3	小物入れ	12	給食袋	1	クッション	23
ティッシュ入れ	2	小銭入れ	4	クッション	6	ウォールポケット	7
ふでばこ	1	ティッシュケース	3	カード入れ	2	ペン入れ	3
補修	4	その他	10	コースター	1	その他	3
針山	2	ぞうきん	23	ウォールポケット	1	エプロン	6
マスコット	1	クッション	15			ランチョンマット	5
まくらカバー	1	補修	7			カバー類	4
足ふきマット	1	お手玉	4			まくら	3
		カバー類	4			服	3
		ぬいぐるみの服	3			スカート	2
		コースター	3			犬の服	1
		刺しゅう	2			ミトン	1
		針山	2			バンダナ	1
		壁掛け	2			コースター	1
		タペストリー	1			人形	1
		カーテン	1			リース	1
		ウォールポケット	1			リサイクルマット	1
		エプロン	1				
		ランチョンマット	1				
		鍋つかみ	1				
		キーホルダー	1				
		ワッペン	1				
		ギャザーよせ	1				

ミシン縫いについては、ふくろ物、小物入れ、クッションなどが多かった。これらは、家庭科の製作活動でも製作されている物で、家庭科で学んだ知識や技能を、学校以外での製作に役立てているということが伺えた。また、女子の中には、衣服やスカートという高度な知識や技能を必要とするものを製作しているケースがあり、製作活動に強い意欲をもつものがいることが伺えた。しかし他方で、学校外での製作経験の全くない児童や、極めて経験の少ない児童もあり、これらのことは児童間の被服製作に対する興味・関心、あるいは知識・技能の定着の状況に大きな個人差があることを示している。児童個々の興味・関心に即した授業を実践するには、今後、教師はより幅広い知識・技能と、柔軟な指導力が必要となってくるであろう。

８．家族の製作行動状況

家族の製作行動の実践状況について、子どもからみてどの程度なされているかを表10に示した。

全体でみると、「よくしている」と「たまにしている」を合わせると60.7%と、半数以上の家庭では、子どもたちが家族の製作行動をよく見ていることになる。一方で、「まったくしない」と答えた子どもが8.8%いた。日常的に製作行動をしない家庭では、子どもたちが製作行動に触れる機会が少ないために、基本的な知識・技能を身につけることはもちろん、製作活動に対する興味・関心をもつことにおいても、その機会が失われているといえる。家庭での製作活動は、学校における製作活動で生かされ、学んだ知識や技能を定着させる場となる。家族の製作行動に対する取り組みは、子ども達にとって大きく影響を与えることとなるだろう。

表10　家族の製作行動の実践状況　　人(%)

	よくしている	たまにしている	めったにしない	まったくしない	わからない	無記入
男子	19(13.1)	57(39.3)	39(26.9)	16(11.0)	10(6.9)	2(1.4)
女子	41(23.4)	77(44.0)	27(15.4)	12(6.9)	14(8.0)	1(0.6)
合計	60(18.8)	134(41.9)	66(20.6)	28(8.8)	24(7.5)	3(0.9)

$\chi^2 = 12.24 > \chi^2_{0.05} = 11.07 = 5$

Ⅳ．まとめ

以上、児童アンケートより、日常生活における衣生活に関する取り組みの現状や、「生活に役立つ物を製作しよう」の授業についての実態把握をおこなった。

日常生活における衣生活に関する取り組みでは、「自分の着る服を選ぶ」ことについてはよく行われていたが、洗たくに関する取り組みや、補修の取り組みはあまり頻繁に行われていないという結果であった。また、日常生活における製作の取り組みでは男女差が大きく、女子は「たまにする」と答えた児童が多かったのに対して、男子は「まったくしない」と答えたものが多かった。

「生活に役立つ物を作ろう」の授業については、男女ともに肯定的に捉えていたが、女子の方がより、「好き」と答えた割合が多かった。製作活動が得意か苦手かでは、女子が「どちら

かというと得意」と答えた児童が多かったのに対して、男子は「どちらかというと苦手」と答えた児童が多く、女子に比べ、男子の方が苦手意識をもっているということが明らかとなった。苦手と感じる具体的な技術を調べたところ、「ミシンの糸のセット」や「玉止め」など、製作活動における基本中の基本ともいうべき技術であり、基礎・基本の定着の徹底を図り、学習意欲を向上させ、日常生活への実践に向けた態度を育成する必要があるといえる。

また、今後さらに学習したい内容として、男女ともに「ミシン縫い」を上げ、他の内容と比較しても多かったことから、ミシン縫いに対する興味・関心の高さが伺えた。また、製作活動で学んだことを日常生活でどのようなところで活かしているかを尋ねたところ、「布を使って物を作ること」と答えた児童が最も多く、製作に対する意識が強いということが明らかとなった。しかし、「購入時気をつけること」や「環境や福祉問題につなげる」といった答えも少なくなかった。縫うことと環境問題や福祉の問題と関連させて学習するというような、視点を広げることも必要になる。

製作活動を意欲的に取り組むための改善点としては、自分で作りたいものを作れる事と、そのための人的・物的環境の充実を求めていた。

製作活動は、児童が興味や関心を持ち、積極的取り組める活動であることが改めて明らかとなった。また、多様な意義を含み、衣生活に関することはもとより、環境問題や進路選択に生かすなど、日常生活にも幅広く学んだ知識や技能を生かせる有意義な学習活動である。本研究で得られた課題を今後の製作活動の学習に生かし、学習意欲を向上させ、基礎・基本の定着を図り、日常生活への実践に向けた取り組みへとつなげ、製作活動のさらなる充実を目指し、授業実践を行っていきたいと考える。

参考文献

1）日本家庭科教育学会：『児童・生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築―家庭生活についての全国調査の結果―』（2002）
2）井上輝子：江原由美子編者：『女性のデータブック』有斐閣（1991）
3）文部省：「家庭や地域などでの子どもの生活体験や自然体験等に関する調査」（1999）
4）竹吉昭人：修士論文「小学校家庭科における布を用いた製作活動の授業開発」（2005）
5）文部科学省：『小学校学習指導要領解説　家庭偏』（2004）